

久米正雄と立岩家の人々

安場保和と久米由太郎

安場保和が福島県に着任してすぐの明治5年(1872)8月に、学制が発布された。これを受け、各地で小学校の設置と入学の奨励がなされた。次に、小学校教員の養成が急務となり、福島県は文部省に小学校教員派遣の願を提出している。文部省からは、師範学校卒業生を順次派遣する回答があった。

明治7年(1874)に東京師範学校上等学科を卒業した久米由太郎は、福島県の「小学校教則講習所」(福島師範学校の前身・現在の福島大学)に訓導兼教場監事(校長)として着任した。県令安場保和の要請を受けたものであった。

久米由太郎は、久米正雄の父である。明治16年(1883)まで、福島県の教員養成に尽力した。



久米 由太郎

久米 ユキ

立岩家と久米正雄

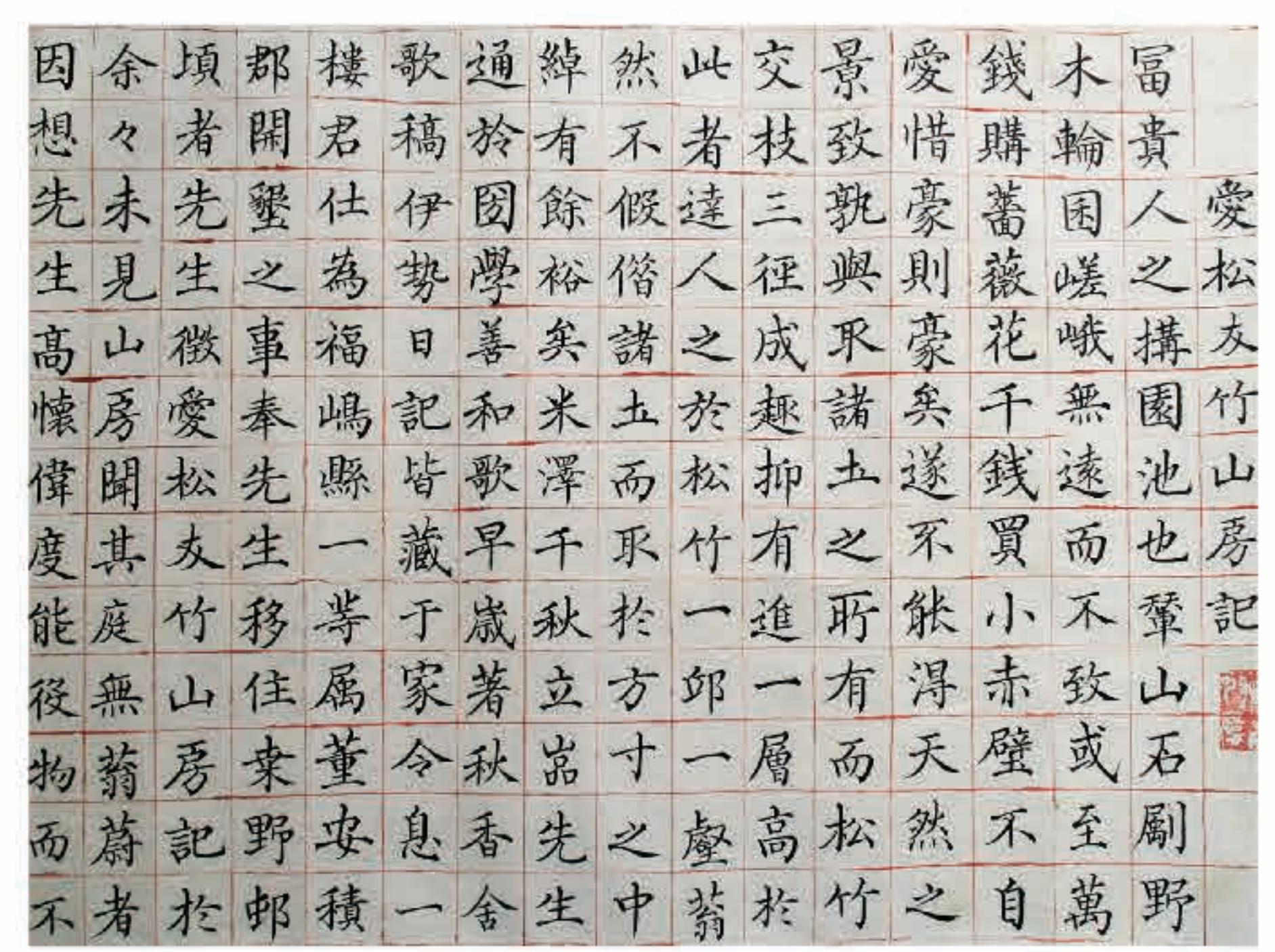
立岩家は、戦国時代の信濃国葛山衆の子孫で、上杉家重臣の直江兼続の直臣団として、米沢へ移住した武士であった。

立岩一郎の父・立岩善五郎秀年は、武士であると共に、文人・歌人でもあった。明治に入り、雅号「千秋」を本名とした。福島県に採用された一郎は、家族を呼び寄せている。

久米由太郎は、千秋を大変尊敬していた。千秋と交流を持った由太郎は、一郎の長女・ユキと結婚した。



立岩 千秋



愛松友竹山房記(部分)

立岩家文書 郡山市歴史資料館蔵
明治13年(1880)に久米由太郎(久米正雄の父)から立岩千秋(立岩一郎の父)に贈られたもの。



立岩一郎の家族写真

立岩家文書 郡山市歴史資料館蔵
明治18年(1885)5月に撮影したもの。左から立岩一郎の妻・カネ、養嗣子・震作、一郎の父・千秋、震作の妻で一郎の次女・フサ。

久米正雄と開成館

久米由太郎は、福島県を辞職し、長野県へ転出した。正雄は、長野で誕生した。

明治31年(1898)に、由太郎が校長を勤める長野県の上田尋常高等小学校の校舎が火災にあい、その責任を取り由太郎は自害した。

残された家族は、母・ユキの実家がある桑野村へと移り住んだ。開成館1階の一角を借り、生活をした。正雄は、開成館から、桑野尋常小学校(現在の開成小学校)、郡山第一尋常小学校(現在の金透小学校)へと通学した。明治38年(1905)に安積中学校(現在の安積高校)へと入学した。

郡山は、近世以降俳句が盛んで、正雄が学んだ安積中学には、俳人でもある教頭西村雪人、教師田辺三貝がいた。彼らの影響を強く受けた正雄は、本格的に俳句を始めた。

正雄は雅号を「三汀」とした。開成山の三つの池にかけたものであると共に、三貝先生の三と、上級生の汀子の汀から取ったものだと、正雄自身が述べている。

三貝は、久米家同様に開成館に居住しており、正雄は小学生時代から三貝に私淑していた。



幼少期の久米正雄
立岩家文書 郡山市歴史資料館蔵
前列右側が久米正雄。



久米正雄歌碑
郡山市立開成小学校に建立された歌碑。
「古里の小学校の鐘の音をふと聞きしより涙流る」



久米正雄句碑
こおりやま文学の森資料館内に建立された句碑。
「魚城移るにや寒月の波ざざら」



久米正雄句碑
開成山公園(郡山市開成)に建立された句碑。
「松柏の嵐の底や返り花」



明治天皇御巡幸時写真 郡山学校(現 金透小学校)
立岩家文書 郡山市歴史資料館蔵



昭和初期の開成館
画像提供:郡山市

